

F/T12

FESTIVAL/TOKYO



東京文化発信
プロジェクト

ステップメモリーズ—抑圧されたものの帰還 / グリーンピグ
構成・演出: ユン・ハンソル

Step-Memories – Return of the Oppressed / greenpig
Concept, Direction: Hansol Yoon

11/22 (Thu) - 11/25 (Sun)

にしすがも創造舎

Nishi-Sugamo Arts Factory



2020年オリンピック・
パラリンピックを日本で!

© Hansol Yoon



なんのための演劇か。「記憶の経験」が拓くもの

——『ステップメモリーズ』は、朝鮮戦争を題材にした作品です。休戦50年を迎えようとする今、改めてその記憶と向き合う理由を教えてください。

個人的な過程をお話すると、9.11の発生時にNYに滞在していたことをきっかけに、3年ほど、戦争を題材にした作品を作っていた時期がありました。その後ソウルに戻り、現代の韓国における社会問題を扱っていたんですが、そこにはどうも朝鮮戦争を端に発する特徴、痕跡があると感じるようになり、ふたたび戦争について考え始めました。当初は「記憶」を扱うというよりは、権力による一般人への抑圧やそれに対する怒り、告発の形をとった作品を考えていたんです。でも、美術家をはじめとする多くの人たちと共に資料を調べていく中で「これは単純な告発でどうにかできるものではない」と感じるようになりました。そして、これまで語られてこなかった戦争の記憶をどう語ることができるのか、また、どうすればこのような事態をふたたび起こさないようにできるのかということの方に問題意識を抱くことになった。それがこの『ステップメモリーズ』の創作に繋がっていったわけです。

——ユンさんは、本作の台詞のなかで「記憶の再現ではなく、記憶との対談をしたい。記憶の回復でなく、感覚の回復をしたい」と書かれていますね。こうしたアプローチに至ったのはなぜですか。

長い間埋もれていた戦争の記録やそれに関わる表現に目を通すうちに、今までこうした記憶が語られなかったのは、必ずしも見えない権力による抑圧のせいだけではないと、気がついたんです。こうした記憶を語った後、自分自身はどう

生きることができるのか——。多くの人々はそのことを恐れて、自らの記憶を語らずにいたんです。たとえば自分の親が殺されたといった記憶を語った後、自分はどうになってしまうのか。公的な権力とは別の理由が、彼らの記憶を蘇らせることを妨げていたのです。

この作品の半分以上は、沈黙で作られていると思います。沈黙、何も語れないということ自体が、私たちのたどり着いた表現です。記憶と向き合うのは、辛く、苦しい体験です。記憶をどのように弔うことができるのか。事実に基づいてそれを再構成するだけでは、記憶を蘇らせ、弔いすることはできませんし、二度とそれが起こらないようにすることもできない。それよりもむしろ、現在の我々もまた、抑圧された記憶と共に生きているということ、その感覚を蘇らせることこそが重要だと思いました。

——戦争や災害など、当事者にしか語ることのできない、あるいは当事者自身も引き受けることができないような状況を、それでも何かしらの方法で語ろうとする。それが表現者に課された役割なのかもしれません。

語ることすら難しいようなことをどう語るのか。それは、俳優やスタッフとの話し合いの中でも問題になりました。このような作品を作る際に、被害者と自分を同一視することは容易です。またその一方で、加害者と自分を重ねることは難しい。でも、この戦争について調べていると、虐殺にかかわった加害者の多くが、今もそのトラウマに苦しんでいることが分かってきたりもしたんです。それが、「われわれは被害者であり加害者で

もある。なぜそうであるのかを明らかにしなければならぬ」という台詞に結びついていきました。

虐殺を直接的に体験するのは不可能です。ではどうしたら公演を通じ、あの戦争、虐殺に感覚的に近づくことができるのか。その答えは戦争がどうだったか、虐殺がどういうものであったかを単純に定義するのではなく、自らの感覚すべてを使ってそれに向き合うことにありました。そこで出てきたのが埋葬、土に触れるというアイデアです。そうやって、記憶だけでなく、感覚が回復されてはじめて、抑圧されていた過去にも向き合うことができるのではないのでしょうか。そうでなければ記憶はまた埋もれてしまう。そもそも公演とは、そのような“出会い”のための場ですから。

——グリーンピグの作品を体験すると、視覚、聴覚、触感から、さらに感情や思考の扉が開かれていくことを実感します。

もう一つ創作において重要だったのは、「なぜ一般人が死ななくてはならないのか」という疑問でした。たとえば、東日本大震災の影響について考え、なぜ原子力発電所が存在するのかを考える。するとそこには経済的な理由と政治的な理由の両方があることに思い至ります。それをさらに追求すると資本主義の問題にもたどり着く。私は戦争についても、その背景にあった政治的状況、その展開を紐解きたいと思いました。なぜそのことによって一般の人が被害を負ってしまうのかを問いたかったのです。その答えを得て初めて、ここで扱っている記憶がなぜ隠蔽されなければいけなかったのかを、改めて考えることができると思います。

演劇は手段である

——グリーンピグの作品やその活動についてのマニフェスト(ユン・ハンソルの「演劇宣言」4-5p参照)を読ませていただきました。その中に「greenpigの作品は抵抗やエクソダスのためのマニュアルあるいは道具である」という一節がありますね。そこで言及されている、抵抗や離脱とはどのようなものなのでしょう。

その質問の答えは、なぜ私が演劇をやっているのか、なぜ芸術をやっているのかという、本質的な質問の答えにもなるでしょう。そもそも芸術とは政治的な行為だと私は思います。そして、芸術に携わるということは、社会の物質的な側面に貢献しないと宣言することです。それはつまり、食べるための仕事はしたくない、しないという宣言でもあります。

最近の映画やTVなどのメディアに映し出されるのは、夢、不確定な未来、作られた過去ばかりです。観る方もそれを望んでいる。要するに、現実と向き合うのが嫌なんです。しかし、だからこそ私は、現実を生々しく経験させることに芸術を見出すわけです。現代においては、現実について発言すること自体が、抵抗でありエクソダスになりえます。当たり前の日常、現実の中で、当たり前ではない現実を経験してもらう場を作りたい。それがこの辛い現実の中にあってもなお、そこから抜け出すための一つの方法なのではないでしょうか。

今の世の中が辛く苦しいのは、欲望のせいです。日本もそうかもしれませんが、韓国では特に

欲望は開発という形で現れます。人々が家から追い出されるといった状況は、ある特定の企業や大きな権力を持った人の欲望のせいとは限りません。私たちがそれぞれに「もう少し広い部屋に住みたい」「きれいな街に住みたい」「公園を増やしたい」と願う、その欲望が、結果的に隣人を追い出すことに繋がっているんです。ですからこうした欲望を見直し、その欲望が形作っている社会について考えること、それを経験させることが、私の考える抵抗やエクソダスになるわけです。非常にナイーブな考え方もかもしれませんが。——おっしゃる通り、演劇や芸術は、社会に対する有効なアプローチですが、ユンさんは「演劇はコミュニケーションの道具ではない」ということも同時に宣言されています。多くの人に役立ち、理解され、共感を呼ぶことを前提にした作品を求められる中で、ユンさんは観客との関係をどのように考えていらっしゃるんですか。

もっとも積極的で、成功を収めているコミュニケーションは、広告でしょう。広告は効果を求められるものですから、100人が100人、同じリズムでそれを受け取り、それを買いたいという欲望を持つようにしむけなければならない。演劇はその

反対です。すべての観客が、すべてのできごとを、同じリズムで受け取ることは不可能だし、それを望むような場でもない。私は公演を「観る」というよりも「経験する」という言葉で表現したいのですが、それは「読書」に似たイメージです。本を読む速度は、人それぞれ。最初から最後まで、全部をゆっくり読む人もいれば、部分部分を読む人もいますよね。均一化されたリズムや感情へ導くのは、抑圧と同じ行為です。そのようなコミュニケーションは芸術の範疇にあるものとは言えません。私は、そうではないものが演劇だと考えているんです。

もちろん、この作品を皆さんと共有したいという意志は持っています。ただ、何かのメッセージを残したいとか、主張したいということではなく、私は問いを明確にしたいのです。そしてその問いをぶつけられた時の戸惑い、見たくないものを見てしまった苦しさを経験してもらいたい。この作品で言えば、歴史の中で抑圧された記憶とどう出会うことができるのか。その問いが明確に皆さんに伝わればよいと思っています。

(2012年8月13日／聞き手：相馬千秋、翻訳：李丞孝、構成：鈴木理映子)

ユン・ハンソルの「演劇宣言」

現在の闇の中から私たちに辿りつこうとしても、それが出来ないこの光を知覚すること。これが同時代人になる意味である。それゆえ、同時代人は珍しいし、同時代人になるためには何よりも勇気が必要なのだ。なぜなら同時代人になるのは、時代の闇に視線を固定できることと、私たちに向かいつつも私たちから無限に離れる光を知覚できることを意味するからである。あるいは、守ることの出来ない約束時間を守ることを意味する。

——ジョルジョ・アガンベン

「大人」フォビア

私は40歳だ。大人のはずだ。10代から30代まで私の日記を貫く言葉は、「大人を殺そう」あるいは「大人は死ぬべき」だった。刺すわけにはいかないが、その嫌悪感は今もそのままで、自己嫌悪にまで至っている。歳を取るというのは、それだけで十分醜いのだ。

「精神」フォビア

私は「演劇精神」、「アーティストの使命感」なんかを嫌悪する。面倒くさくてつまらないなら、もう止めてほしい。

「コミュニケーション」フォビア

口ではコミュニケーションとばかり言ってコミュニケーションを軽く扱うことは、最も極端な政治的排除である。コミュニケーションがうまい奴らは疑おう。芸術はコミュニケーションできない。思考の対象となったり消費されたりするだけマシなのだ。

宣言：ユン・ハンソルの「する」と「しない」

——演劇。芸術。これは「同時代人」になろうとする絶えざる努力から生まれる。

——公演は「見つめる」ことである。イエスを呼び出したのは光ではなくその時代の闇だったように、公演は時代の闇を見つめる行為である。不特定の鮮明な瞬間が繋がらないまま転がっている様子を、闇の

中で辿る行為なのである。

——知っていることは知っていると、知らないことは知らないこと、やったことはやったと、やっていないことはやっていないと明確にする。

——美意識は統制されたり支配されてはならない。対象を徹底的に見つめる力。すなわち芸術とは、飼いやられていない方法で真実を描き出す力である。美意識を統制し支配しようとする者らと、困難な戦いを始める。

——人々がすでにうまくやっていることはしない。うまくやるよりは、代替不可能なことをする。

——私は挑発する。ただ同意しがたいから挑発するわけではなく、全てが簡単に柔かいのが耐えられないからである。真実は私たちの皮膚を刺し良心を苦しめる。真実の感触を得たい。真実がアイスクリームのように溶けて崩れ落ちる様子を見てはいられない。——そこまでやる必要があるかという質問。思い込むな。やっていないことは全て分からないことなのだ。芸術はできないものを確認することから始まる。

——演劇をするために共同体を作ることはできない。みずばらしくても一緒にいるために演劇をしているのである。

——さまざまな観客が同じリズムで舞台に集中しなければならないというルールなんて捨ててしまった。作品が見られるより読まれることを望んでいるからだろう。読むことを同じリズムですることはできない。結局観客が現在より未来にとらわれるようにしなければならない。

——「演劇をする」あるいは「これは演劇だ」、演劇をするためには「これが演劇だ」という命題を否定しなければならない。これを練習するのは非常に難しい。再現の失敗を繰り返し、結局「再現の失敗を再現する」という失敗になる。

——昔ながらの、かつ深い自分なりの方法論、そして厳しい自己規範。そこから完成される「形式」。これが芸術でありアーティストの証なのか。この形式が完成されなかったり古臭かったら、必ず奇妙なものを作

り出すか、自由を言い立てて暴れることになる。

——反復を通して無へ、その無を通して純粋へ、純粹のディテールから物語と形式を作り、その簡潔さと心臓が破裂しそうなときめきを持って続けたい。

——作品を創ることは自分の疑いを解き続け、その底を見る過程だと思っていた。しかし、それは間違いで、自分の疑いが正当であると主張し続けることだとわかった。自分自身の疑いを整理し、不安や恐れに向き合うことなのである。時には正面から、時にはそと。

——結果や終わりが見える瞬間に、道に迷い始める。死が見える瞬間のような避けられない終わりが見えると必ず道を迷ってしまうように。作品を創ることは、常に道をゆく過程としてのみ存在する。結局作品の完成はない。ある瞬間止めるだけである。

——全ての偉大な芸術はいつも困惑させる挑発である。辛い傷や解決されない問い、考えたくなくても存在するものと、予想外の時間と場所で出会うことなのである。このように強制された時間と空間を経験する。

——私は「お客様」として人々を招待するわけではない。劇場は我々が人々をもてなす場所ではない。対話をするために出会う場所なのである。どのような対話をするかは観客次第である。私は全員とコミュニケーションすることはできない。これは極めて正常なことである。誰とも簡単には対話できないのと同様に、誰もが簡単に理解できる演劇はない。私が全ての人とコミュニケーションできると言うなら、それは観客と

演劇に対する冒涇である。これはただ対話の本質に過ぎない。

——ユン・ハンソル、グリーンピグの作品は、抵抗やエクソダスのためのマニュアルあるいは道具である。

未来。

未来。

シリーズの作品を作る。

理由は、まあ……主に知りたいことから作品を始めるので、知りたいことは当然生まれ続き、飽きるまで続けるのだろう。

グリーンピグは『私は嬉しい』、『誰がモハメド・アリの顔にミサイルパンチを投げたのか』、『延辺母』で移住3部作を終えた。また、『ステップメモリーズー抑圧されたものの帰還』で大韓民国シリーズを始め、来年からは『2. 国家保安法』、『3.Theキリスト教』、『4. 親日派』、『5. 赤』(順番及びタイトルは未定)の制作を予定している。韓国のアーティストシリーズも進行中である。去年、詩人のベク・ソク(白石)を題材に『とにかくベクソク』を上演し、今年はナ・ヘソク(羅蕙錫)をテーマに作品を準備している。

ノートに書いておいた素材の番号がとくに200を超えている。その全てをやるわけにはいかないし、全部やりたくもない。

私はいつも演劇をやめる日を夢見ている。そうしながら続けた方が、やめる時にもっと感動的だろう。

私の将来の夢は料理人。

ユン・ハンソル: 演出家・グリーンピグ代表

1972年生まれ。大学で社会学を専攻した後、漢陽大学演劇映画科大学院、コロンビア大学大学院で演劇を学ぶ。2006年にグリーンピグを結成し、代表と演出を務める。07年、『私は嬉しい』で文芸振興基金新人アーティストに選定される。10年にはソウル・マージナル・シアター・フェスティバルにおいて『ステップメモリーズー抑圧されたものの帰還』を発表。同じく10年に発表した『人は人に狼』で国立劇場フェスティバルの優秀演劇に選ばれるなど、近年、韓国で最も動向が注目される演出家の一人。11年、今後の躍進が期待される韓国のアーティストに贈られる「斗山蓮尚芸術賞」を受賞。現在、檀國大学校教授。



©Ryosuke Kikuchi

グリーンピグ

2006年、演出家ユン・ハンソルを中心に結成。ソウルを拠点に分野横断的なコラボレーションを通したオリジナル作品や古典を再構成した作品を上演する演劇集団。主な作品に、『私は嬉しい』(07年)、『ヴィンカがなければ私は寂しすぎる』(08年)、『ステップメモリーズー抑圧されたものの帰還』(10年)、『誰がモハメド・アリの顔にミサイルパンチを投げたのか』(10年)、『I am Sexking』(11年)など。

構成・演出：ユン・ハンソル
演出助手：パク・ヒョンジ
出演：クァック・ドンヒョン、バック・ハヌル、イ・ドンヨン、イ・ジョンホ、イ・ビルジュ、
ジョン・ソズ、ジョン・ヤンア、ファン・ミョン、イム・ジョンヒ、ジョン・デヨン、パク・
ギウォン、アン・ミンジョン、百元夏緒（さいたまゴールド・シアター）、
宮田進作（さいたまゴールド・シアター）、いとうめぐみ、林 亮佑、岡部桃佳
振付：キム・スジョン
照明：チェ・ボユン
音楽：ミン・キョンヒョン
映像：ハム・ヤンア
ドラマトウルク：バック・サンヒョン
脚本家：ジョン・ソンヒョン
衣装：イ・ユソソ
カメラマン：ホン・ミョンギョ
プロデューサー：イム・インザ

東京公演スタッフ
技術監督：寅川英司＋鴉屋
技術監督アシスタント：十万里紀子
舞台監督：小野哲史
演出部：大友圭一郎、鈴木康郎
小道具コーディネート：栗山佳代子
美術コーディネート：福島奈央花
照明コーディネート：木下尚己（株式会社ファクター）
照明オペレーション：渡辺 慎（株式会社ファクター）
音響コーディネート：相川 晶（有限会社サウンドウイーズ）
音響オペレート：星野大輔（有限会社サウンドウイーズ）
映像コーディネート・撮影／編集：遠藤 豊（ルフトワーク）
プログラミング・オペレーション：簡井真佐人（ルフトワーク／adsr）
映像テクニカル：河内 崇（ルフトワーク）
映像機材協力：株式会社プリズム
映像補佐：三上 亮
衣裳管理：藤田友、及川千春
翻訳監修：石川樹里
通訳：金 世一
通訳補：洪 沅志
記録写真：片岡陽太
記録映像：ルフトワーク、安西剛

協力：斉藤義明（ケイラインロジスティクス株式会社）、小竹駿介（株式会社グ
リーンライン）、神田国弘、尾崎和子、田崎不二夫、藤沼 清、早川一明、
須藤英雄、芥川晃

F/Tスタッフ
制作統括：武田知也、小島寛大
制作：横山由香
翻訳：李 丞孝
フロント運営：北澤英未子、清水美峰子、萩谷早枝子
インターン：吉崎香央里
当日運営補佐：松尾翔太郎、柴田麻美
プログラム・ディレクター：相馬千秋

F/Tクルー
岩城泰斗、金セロム、齋藤望、三鶴泰正、関慧敬、弓野亜希、

日本版製作：グリーンピグ、フェスティバル／トーキョー
助成：韓国文化芸術委員会
特別協力：ソウル・マージナル・シアター・フェスティバル
後援：駐日韓国大使館 韓国文化院
主催：フェスティバル／トーキョー

Concept, Direction: Hansol Yoon
Assitant Direction: Hyeonji Park
Cast: Donghyun Kwak, Haneul Park, Dongyoung Lee, Jungho Lee, Piliu Lee,
Seonwoo Jeon, Yangah Jeong, Miyoung Hwang, Junghee Lim, Daeyong Jeong,
Kiwon Park, Minyoung Ann, Natsue Hyakumoto (Saitama Gold Theatre),
Michiyo Miyata (Saitama Gold Theatre), Megumi Ito, Ryosuke Hayashi, Momoka Okabe
Choreography: Sujung Kim
Lighting: Boyun Choi
Sound: Kyunghyun Min
Video: Yangah Ham
Dramaturge: Sanghyeon Park
Scriptwriter: Seonghyun Jeon
Costumes: Yoosun Lee
Camera: Myongkyo Hong
Production: Inza Lim

Tokyo Performance Staff
Technical Manager: Eiji Torakawa + Karasuya
Technical Manager Assistant: Akiko Juman
Stage Manager: Tetsushi Ono
Stage Assistants: Keichiro Otomo, Koro Suzuki
Props Co-ordination: Kayoko Kuriyama
Stage Design Co-ordination: Naoka Fukushima
Lighting Co-ordination: Naoki Kinoshita (Factor Co., Ltd.)
Lighting Operation: Maki Watanabe (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)
Sound Operation: Daisuke Hoshino (Sound Weeds Inc.)
Video Co-ordination, Recording/Editing: Yutaka Endo (LUFTZUG)
Video Program Operation: Masato Tsutsui (LUFTZUG/adsr)
Video Technical: Takashi Kawachi (LUFTZUG)
Video Equipment: Prism Co., Ltd.
Video Assistant: Ryo Mikami
Dressers: Tomo Fujita, Chiharu Oikawa
Translation Supervisor: Juri Ishikawa
Translator: Seil Kim
Assistant Translator: Wongee Hong
Photography: Yohta Kataoka
Video Documentation: LUFTZUG, Tsuyosi Anzai

Special thanks to Yoshiaki Saito ("K" LINE LOGISTICS, LTD.) Shunsuke Kotake (GREENLINE
co.,Ltd.), Kunihiro Kanda, Kazuko Ozaki, Fujio Tasaki, Kiyoshi Fujinuma, Kazuaki
Hayakawa, Hideo Sudo, Akira Akutagawa

F/T Staff
Production Manager: Tomoya Takeda, Hirotoomo Kojima
Production Co-ordination: Yuka Sugiyama
Translation: Seunghyo Lee
Front of House: Fumiko Kitazawa, Mihoko Shimizu, Saeko Hagiya
Trainee: Kaori Yoshizaki
Crew: Syotaro Matsuo, Asami Shibata
Program Director: Chiaki Soma

F/T crew
Taiko Iwaki, Saerom Kim, Nozomi Saito, Yasumasa Mitsuru, Hyemin Min, Aki Yumino

Japan version produced by greenpig, Festival/Tokyo
Supported by Arts Council Korea
Special co-operation from Seoul Marginal Theatre Festival
Endorsed by Korean Cultural Center, Korean Embassy in Japan
Presented by Festival/Tokyo

ポスト・パフォーマンス・トーク（韓国語、日本語逐次通訳つき）
11/23（金）14:00公演終了後 ユン・ハンソル＋市村作知雄（フェスティバル／トーキョー実行委員長）
19:30公演終了後 ユン・ハンソル＋本公演キャスト

関連プログラム「F/Tユニバーシティ」Vol.9 ユン・ハンソル（韓国語、日本語逐次通訳つき）
11/24（土）15:00～18:00 ユン・ハンソル、ナビゲーター：森山直人（演劇評論家、京都造形芸術大学舞台芸術科教授）
会場：にしがも創造舎 料金：無料（要 Web 予約）定員：30 名（先着順、定員に達し次第終了）

フェスティバル/トーキョー組織委員

Festival/Tokyo Organization Committee

天牛大生	振付家、演出家
萩田伍	アサヒグループホールディングス株式会社 代表取締役会長 兼 CEO
扇田昭彦	演劇評論家
永井多恵子	社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター会長
蛸田希雄	演出家
蛸田秀樹	演出家
野村高	狂言師
福原義春	株式会社資生堂 名誉会長

(五十音順)

Ushio Amagatsu	Choreographer, Director
Hiroshi Ogita	Chairman and Representative Director, Chief Executive Officer, Asahi Group Holdings, Ltd.
Akihiko Senda	Theatre critic
Takeo Nagai	Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Yukio Ninagawa	Director
Hideo Onuma	Director
Man Nomura	Kyogen actor
Yoshihara Fukushima	Executive Chairman, Shiseido Co., Ltd.

主催：フェスティバル/トーキョー実行委員会
東京都、豊島区、
東京文化発信プロジェクト室・東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）、
公益財団法人としま未来文化財団、NPO法人アートネットワーク・ジャパン

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee
Tokyo Metropolitan Government, Toshima City, Tokyo Culture Creation Project & Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), Toshima Future Culture Foundation, Arts Network Japan (NPO-JN)

共催：社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター

Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)

協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂

Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd.

助成：公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団

Supported by Asahi Group Arts Foundation

後援：外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会

Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO

特別協力：武蔵浦検本店、東武百貨店池袋店、サンシャインシティプリンスホテル、
ホテル メトロポリタン、ホテル グランドシティ、チャコット株式会社、株式会社白永社

Special co-operation from SEIBU IKEBUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IKEBUKURO, Sunshine City Prince Hotel,
Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Chacott Co., Ltd., Hakusuisha Publishing Co., Ltd.

協力：東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、
豊島区観光協会、社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会
Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Industry Association, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association

宣伝協力：株式会社ポスターハリス・カンパニー、
有限会社ネビュラエクストラサポート（公募プログラム）

PR support: Poster Hari's Company, Nebula Extra Support Co., Ltd. (for F/T Emerging Artists Program)

メディアパートナー：J-WAVE 81.3 FM、新潮、ART IT、CINRA.NET

Media Partners: J-WAVE 81.3 FM, SHINCHO, ART IT, CINRA.NET

認定：公益社団法人企業メセナ協議会

Approved by Association for Corporate Support of the Arts

平成24年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2012

会期：平成24年（2012年）10月27日（土）～11月25日（日）



F/Tクルー：会津麻美、青島美和、安達 彩、石引康子、一ノ瀬真志、岩城泰士、上杉康政、宇都宮千陽、内海ちさき、遠藤乃利子、大泉尚子、大賀啓子、大庭愛香、岡崎由子、緒方彩乃、岡本光代、岡本佳子、尾澤弥生、尾行 尊、加藤真帆、横子西美美、金子積高、川口 麗、木口七海、木下玉美、金 幸子、計 智繪、桐谷佳美、黒沢久美、小嶋聖子、齊藤 聖、斎藤絵里佳、崎津恵梨、佐藤春香里、佐藤 聖、島崎 珠子、後田知子、鈴木智香子、間島弥生、高橋悠生、田中希希、寺本奈津美、黒沼静香、陶 旭恵、永井彩子、中村直樹、中村みなみ、西山由紀、西岡千行、能戸みな美、畑端富美、初村和子、花田雅美、早川 幸菜、林原 菜、人見麻美、廣瀬加乃、福原麻妃子、根村 舞、藤原蘭太、船山結菜、増尾 志、松嶋曜奈、村田早絵、松本琉帆、丸山未来、三輪泰正、関 慧友、矢島 剛、内野明子、山口侑紀、山室木園、山分将司、丹野亜希、吉田由貴、米谷今日子、渡辺 聖

F/T Crew: Mami Aizu, Miwa Aoshima, Aya Adachi, Yasuko Ishibiki, Takashi Ichinose, Taito Iwaki, Yasunasa Usugui, Chikaki Utsunomiya, Chikaki Utsuni, Noriko Endo, Ozumi Naoko, Keiko Ogo, Aika Omichi, Yuki Okazaki, Ayano Ogita, Mitsuyo Okamoto, Yoshiko Okamoto, Yayoi Oizawa, Chihiro Ono, Maki Rato, Naomi Kanagaki, Joy Kaneko, Akane Kawaguchi, Nanami Kiyuchi, Tamami Kiyuchi, Hiroko Kozaki, Naonori Sakai, Erika Saito, Eri Sakihama, Yukari Sato, Kyoko Sato, Momoko Shimotori, Tomoko Shibata, Chikako Suzuki, Yuki Sekijima, Yusuke Takahashi, Yuki Tanaka, Natsumi Teramoto, Shizuka Terumura, Kuro Tota, Sayako Nakai, Naoki Nakamura, Mimi Nakamura, Yuki Nakayama, Takayuki Nishikaki, Miroki Noto, Fumi Hatake, Kazumi Hattamura, Masami Hanada, Haruna Hayakawa, Shiori Hayashibara, Mami Himoto, Kano Hirose, Mariko Kikuchi, Kenta Fujiwara, Yuna Funakawa, Kei Masubuchi, Rina Matsushima, Sae Matsudo, Yoya Matsumoto, Mirai Maruyama, Yasunaka Mitsuru, Hyemin Min, Aya Tojima, Seiji Tanaka, Yuki Yamaguchi, Kizeno Yamamura, Masashi Yamawake, Aki Yumino, Yuki Yoshida, Kyoko Yonemitsu, Sara Yonemitsu

編集：鈴木理映子、フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

発行：フェスティバル/トーキョー実行委員会

アートディレクション+デザイン：佐藤直樹+中澤耕平 (ASYL)

オペレーション：小村 剛

印刷：アトミ株式会社

発行日：2012年11月22日

禁無断転載

フェスティバル/トーキョー実行委員会

Festival/Tokyo Executive Committee

名誉実行委員長	高野之夫	豊島区長
実行委員長	市村作知雄	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
副委員長	吉末昌弘	豊島区文化商工部長
委員	八巻規子	豊島区文化商工部文化デザイン課長
	大沼映雄	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事/事務局長
	岸正一	公益財団法人としま未来文化財団 部長
	遠池奈緒子	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 代表
	相馬千秋	NPO法人アートネットワーク・ジャパン プログラム・ディレクター
監事	天貝 勝己	豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	福井健策	北海道弁護士（常置型法律事務所）

Honorary President of the Executive Committee: Yoku Takano, Mayor of Toshima City
Chairman of the Executive Committee: Sachio Ichimura, Arts Network Japan Committee
Vice Chairman of the Executive Committee: Masahiro Yoshida, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City
Committee Members: Noriko Yamaki, Culture, Commerce and Industry Division, Director of Cultural Design Section
Hideo Onuma, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation
Masato Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation
Naoko Hasegaki, Arts Network Japan Representative
Chikaki Sosa, Arts Network Japan Program Director
Supervisor: Katsumi Amagai, General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City
Legal Advisors: Kenzoku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotto Dou Law Office)

フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

Executive Committee Office

プログラム・ディレクター	相馬千秋
事務局長	遠池奈緒子
事務局長補佐	小島寛大
制作統括	武田知也
制作	河合千重、喜友美綾江、小森あや、相山由香、 戸田史子、藤井さゆり
メディア戦略	松本花音
プログラム・リサーチ	クラウトハイム・ウルリケ
アジア事業コーディネート	小山ひとみ、李 丞孝
票務管理	兵衛理江、穴戸内
チケットセンター	佐々木由美子、佐藤久美子
総務	葦原円花、一色 善好
経理	堤久美子
制作アシスタント	坂本美奈、砂山弘、田中沙季、田野入涼子、中山亜以
メディア戦略補佐	冠郷真奈
アジア事業コーディネート補佐	吉岡真衣子
インターン	伊藤芽依、小林弘樹、田端俊也、船橋史、吉崎香央里
技術監督	賀川英司
技術監督アシスタント	河野千晴
照明コーディネート	佐々木真幸子（株式会社ファクター）
音響コーディネート	相川晶（有限会社サウンドウィズ）
アートディレクション+デザイン	アジール（佐藤直樹+中澤耕平+谷藤み子+徳永明子+菊地昌隆）
ウェブサイト	演田真一・田中裕也（株式会社ロフトワーク）
パブリシティ	平昌子、望月章宏
海外広報・翻訳	アンドリュース・ウィリアム
物販	渡辺淳
編集・執筆	鈴木理映子
編集・執筆（「TOKYO/SCENE」）	影山裕樹

Program Director: Chikaki Sosa
Administrative Director: Naoko Hasegaki
Assistant Administrative Director: Hirotsune Kojima
Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordinators: Chika Kawai, Orie Kiyuna, Aya Komori, Yuka Sugiyama, Fumiko Toda, Sayuri Fujii
Media Strategy: Kanako Matsumoto
Program Research: Ulrike Krauthelm
Asia Projects Co-ordinators: Hitomi Oyama, Seunggho Lee
Ticket Administration: Rie Nagahara, Tsuburo Shikida
Ticket Office: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato
Administrators: Madoka Ashihara, Hisayoshi Isshiki
Accounting: Kamiko Tsutsumi
Assistant Production Co-ordinators: Chika Onozuka, Shiori Sunagawa, Saki Tanaka, Suzuko Tanori, Ai Nakayama
Assistant Media Strategy: Nanana Kanamori
Assistant Asia Projects Co-ordinator: Makiko Yoshika
Trainees: Mei Ito, Hiroki Kobayashi, Toshiya Tabata, Fumi Funahashi, Kaori Yoshizaki
Technical Director: Eiji Terakawa
Assistant Technical Director: Chizuru Kano
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)
Art Direction+Design: Asyil (Naoki Sato + Kohel Nakazawa + Yoko Tani + Akiko Tokunaga + Masataka Kikuchi)
Website: Shinichi Hamada + Yuka Tanaka (Istawa+Tanaka)
Public Relations: Masako Taira, Akihito Mochizuki
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
Merchandise: Jun Watanabe
Editor/Writer: Rieko Suzuki
Editor/Writer (TOKYO/SCENE): Yuki Kageyama

お問合せ先

フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

〒170-0001

東京都豊島区西巣鴨4-9-1 にしすがも創造舎 NPO法人アートネットワーク・ジャパン内

TEL: 03-5961-5202

HP: <http://festival-tokyo.jp/>